

性的違和を抱える高校生の自己形成過程

ー学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点からー

横浜国立大学大学院 環境情報学府
博士課程後期 杉山 貴士

The process of making sexual identities for gay youth --From the view point of gender patterns and homophobia in school culture--

Takashi SUGIYAMA
Post Graduate Student : Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

要旨

本稿は、性的違和を抱える同性愛の高校生へのインタビューを通して、高等学校における彼らの性的自己形成過程の一端を検討するものである。ジェンダー規範に包含される異性愛中心性は、高等学校の明示的カリキュラムにおける同性愛の封印と、隠れたカリキュラムによる同性愛嫌悪により支えられている。高等学校において、彼らは(1) 自己受容の困難、(2) 自己イメージ形成の困難、(3) 情報アクセスの困難、(4) 自己開示・人間関係づくりの困難、(5) 事故回避の困難に直面し、結果として、いじめ、不登校、家出などの教育問題を導いていた。特に、同性愛に関する情報へのアクセスを、学校外部にしか求められない状況は、同性愛の高校生が問題予知力を備える性的自己決定能力を育むことが保障されずに性的自己決定を迫られること示しており、現状の高等学校は同性愛の生徒の「性の学習」を奪うことになる。本稿は、高等学校での同性愛の封印解除と積極的なセクシュアリティ教育の必要性を提起するものである。

Summary :

This article has the goal to examine how gay students have developmental process of their sexuality by interviewing them. Heterosexism in school is supported by two curricula, one is an explicit curriculum that is unmentioned homosexual issues, and the other is hidden curriculum that has homophobia. Then they have five difficulties ; (1) Identifying and accepting who he is. (2) Establishing skills to Judge and select appropriate information and/so meeting other gays in a safe situation. (3) Meeting a good role model (who has an ordinary life) and/so establishing a positive self-image (and future careers). (4) Coming out and establishing good human relationships. (5) Avoiding accidental problems. These difficulties make them drop out, bullying, not attending school and run away. Now in the school, they can't have the right of learning sexuality. School should encourage gay students to learn their sexuality and support their rights by inclusive sexuality education.

1. はじめに

近年、性的マイノリティ（性同一性障害者や同性愛者など）の存在は、性同一性障害者の生徒の苦悩を描いたドラマ「金八先生」（TBS 系、2003）に代表されるように、可視化の傾向にあり、社会的認知も広がってきた。1980年代はエイズ関連を中心に、1990年代初頭には、ゲイブームとしての認識でしかなかったが、1990年代後半には、同性愛者団体の運動を契機に同性愛が精神疾患から削除され、学問研究分野においても積極的認知が行われた。性同一性障害者については、性別変更手術の実施や「性同一性障害者の性別の取り扱いに関する特例の法律」（2003）も制定され、法的保護の対象として認知されるにいたった。こうした動きは当事者の人権意識の覚醒とそれにとまなう同性愛者と性同一性障害者のそれぞれの運動が共闘した成果であるが、当事者どうしを結びつけ運動へ導く大きな力となったのが、インターネットの普及である。2000

年以降になり、性的マイノリティのBBS上のコミュニティも飛躍的に増加し当事者どうしの交流も盛んになってきている。

また教育行政における同性愛の位置は、文部省『生徒の問題行動に関する基礎資料』（1979）の「性非行」からの削除（1994）、府中青年の家事件の勝訴判決（1997）により、同性愛者の権利が徐々に明記される方向へ位置づいてきているように思われる⁽¹⁾。

一般的に高等学校は生徒が思春期を迎える場となる。性的気づきと性的自己肯定は思春期において大きな課題のひとつである。性的違和を抱える同性愛の高校生にとって、性的気づきは、疎外感へとつながり、他者との性的気づきを共有できず、性的自己肯定を促す機会を失うことが多いと言われている。社会で一定の認識を得つつある同性愛ではあるが、実際の教育現場である高等学校においてはいまだに不可視化されたままである。

本稿では、高等学校における同性愛者の性的自己形

成過程を、当事者への聞き取りの調査を中心に分析し、そこからもたらされる諸問題を検討することを通して、すべての高校生の性的気づきと性的自己肯定を促すセクシュアリティ教育の提起をめざしたい。

1-1 先行研究と本研究の位置づけ

同性愛研究は、同性愛を精神病理とする立場が出発点となる研究が多かった。フーコーも言うように、近代に入り、同性間の性行為は精神医学の登場により病理化され、精神医学という科学的カテゴリーとして、監視や抑制などの調査対象とされたからである。こうした研究は教育分野でも応用され、例えば、矯正教育の分野においては『非行少年の同性愛行動に関する精神医学的考察』（法務省、1953）が出され、集団生活における同性愛の発生メカニズムの解明と、同性愛行為の常習性が犯罪につながることを警告し、同性愛行為の予防と社会復帰後の同性愛行為をさせない自立支援を提起している。『生徒の問題行動に関する基礎資料』（1979）における「性非行」カテゴリーへの収容も同様であった。教育現場における同性愛の高校生の状況は明らかにされないままに、精神病理であるとされてしまったのである。

しかし、1990年代にはいり、客体であり研究対象でしかなかった同性愛者が、自分の生活や経験に根ざして語り始めた。「語られる」客体から「語る」主体への変化を目指したのである。例えば、伏見（1990）は『プライベート・ゲイライフ』の中で、クイア理論に根ざし「〈ヘンタイ〉宣言」を出した。伏見が出発点となる同性愛者が生活や経験に根ざした「語る」主体への動きは、欧米でのゲイスタディーズやクイア理論を日本で積極的に展開するきっかけとなった。日本におけるゲイスタディーズの現状と可能性を提起した『ゲイスタディーズ』（1997）は、同性愛と異性愛の非対称性というセクシュアリティの政治性を明らかにした。ゲイスタディーズは当事者性を明らかにする立場をとる。しかし、研究に当事者性を持ち込むことは研究の中立性を損ない、恣意的な研究になるのではないかと危惧もある。これまでの同性愛研究が異性愛への疑いを不問にし、同性愛を病理とみることから始める研究そのものが客観的であるはずはないことは明らかである。また人間の日常的な生活や実践は主体形成なしにはありえない。同性愛者という主体を確立することにより、同性愛者をめぐる状況も確認することができよう。また、次へのステップとして同性愛者という主体を脱構築することも、主体形成をすることで可能

になることは見逃せない。ゲイスタディーズは学問の中立性への疑問を投げかけ、当事者に寄与する研究を志向する。

しかし、ゲイスタディーズによる教育学、教育社会学研究には先行研究がとても少ない。教育分野における同性愛研究は、彼らの性的自己形成の現状を検討したのではなく、同性愛を性非行として扱うことが出発点となり、いかに非行から遠ざけるかに集約されている。性教育分野での同性愛の位置づけも、例えば『性教育新学習指導要項解説書』には、「たいていの人あまり行わないか、社会的に受容されないか、せいぜい黙認されているに過ぎない」（日本性教育協会、1990、p221）とある。高等学校には同性愛の生徒はいないように考えられていたのである。

だが、「語られる」客体から「語る」主体を目指すゲイスタディーズの広がりとは、実際に存在する同性愛者の学校生活の側面にも波及した。性教育や生活指導実践においても、同性愛の高校生の現状に関する議論がようやくはじまった²⁾。臨床教育的な研究も、小宮（1998）の同性愛の高校生のゲイ雑誌投稿文テキスト分析にはじまり、いくつかの修士論文などで散見されるようになった。だが、現在ある臨床教育的な先行研究は、現状報告的なものを出すのにとどまっており、問題解決を目指すための方向を探りつつも探りきれていない状況である。

そこで本稿では、高等学校における同性愛の封印状況を確認し、同性愛の高校生への聞き取りを行い、先行研究の再検証を中心に行う。再検証することで、同性愛の高校生の現状を再確認するとともに、先行研究での不足、教育的アプローチ方法の模索を目指す。本稿は、ゲイスタディーズの立場にたち、学校生活を行う当事者に寄り沿う、臨床教育的研究の側面から、同性愛の高校生の性的自己形成過程を明らかにするものである。

1-2 研究方法

本稿では、高等学校には異性愛中心の教材やカリキュラムが存在し、それを「異性愛カリキュラム」と名づけ、同時に教師や高校生の間でも異性愛を中心とする圧力があり、教師や高校生を通して性的自己肯定観を獲得することができず、性的自己形成において困難が生じるのではないかという仮説を立てた。この仮説を当事者たる同性愛の高校生の語りによって明らかにしようとするものである。

高等学校のカリキュラムについては、教科書、学習指導要領の文献分析を行い、同性愛の高校生の語りに

については、主としてゲイグループでの参与観察を中心に、彼らへのインタビューを得る方法をとった。彼らとの語りは、ゲイという当事者であり、研究者の位置にある筆者との相互作用により得られたものである^③。具体的には、大阪、札幌のゲイグループでの参与観察と聞き取り、京都、大阪の有料系ハッテン場（詳細は3-2 参照）での聞き取り、ゲイ雑誌『バディ』の10代のゲイの投稿文の三つの方法による。調査は、1999年6月より2003年6月にかけて行い、接触をもった当事者は約40名、そのうち、自分史を詳しく聞き取れたのは4名であった。

2. 学校における異性愛中心性と同性愛嫌悪

学校は男女平等であるとされてきた。しかし、フェミニズムは、学校がジェンダー規範を再生産する場であることを証明し、それは近年のジェンダーと教育に関する研究で指摘されるところである。

しかも、ジェンダー規範再生産の場となっている学校が、実はジェンダー規範同様に、異性愛中心性をも再生産している。例えば、ハー（Herr, 1997）は多文化主義教育のようなさまざまな価値観を認めあう教育実践でも、異性愛中心性は揺るぎなく存在し、いずれの教育文化にも一貫していると指摘する。この指摘は、ジェンダー規範に異性愛中心性が包含されると考えれば明らかである。異性愛中心性を補完するのは、同性愛嫌悪である。同性愛を忌避することで異性愛指向を強化維持できるからである。バダンテール（1998）は、同性愛嫌悪が与える影響を、同性どうしの友情を育てないばかりか、父親が息子である男の子への接触までも阻むと指摘する。

では、高等学校のカリキュラムではどのように同性愛を捉えているのか。高等学校での性愛や恋愛に関する学習事項はすべて異性愛が中心である。国語の文学作品の鑑賞、歴史の登場人物の学習、家庭科の家族関係の学習など、すべて自明のこととして異性愛とされている。しかしながら、教科書や指導書には、同性愛を忌避するという明確な文言は少なく、同性愛は、教科書に載せられていないというのが現状で、それ以上でも、それ以下でもないように思われる。

明示的カリキュラムには同性愛を肯定も否定もしない、言わば、同性愛を封印した状況である。しかし、これをフェミニズムの知見である「隠れたカリキュラム」から考えてみると、同性愛の封印状況は、実は封印ではなく、否定であり排除であることが明らかになる。

隠れたカリキュラムとは、明示的カリキュラムに対して、潜在的なレベルで伝えられるカリキュラムをいうが、これは教師が無意識・無自覚に生徒への働きかけや、学校文化、男子優先の慣習などが、知らないうちに生徒の価値観の形成に大きな影響を及ぼすものである。フェミニズムは、明示的カリキュラムにおいて、意図的な女性役割、男性役割を示さなくとも、その背後にあるメッセージの存在を明らかにし、教師や高校生が暗黙の了解としての男女の優劣を学びあうことを指摘した。

実は、異性愛中心性についても、ジェンダー規範に包含されると考えると、同様のことが行われていることがわかる。フレンド（Friend, 1993）が指摘するように、異性愛中心性と表裏一体をなす同性愛嫌悪が「2つの沈黙のメカニズム」によって形づくられ強化されている。「組織的排除」と「組織的包含」である。前者は肯定的な同性愛者のロールモデル、メッセージ、イメージの排除で、同性愛者を見えないものとして演出し、後者は、例えば、同性愛が議論に上ったときに首尾一貫して同性愛は病気であるとか、危険な行為であるとつなげて否定的な文脈で語ることである。

学校は、同性愛を、明示的カリキュラムにおいて封印し、隠れたカリキュラムにおいて異性愛中心性と同性愛嫌悪により否定し排除する。次項では、隠れたカリキュラムの内実を、〈教師－生徒〉関係、〈生徒－生徒〉関係の2つの側面から検討する。

2-1 〈教師－生徒〉関係

明示的カリキュラムでは出てこない同性愛は、実は補完される形で教師から多くだされる。つまり、教師の生徒への働きかけが、ジェンダー規範を強いているのと同様に、同性愛を同性愛嫌悪の文脈に位置づけ、結果的に否定や排除の対象にしている。例えば、理科の授業で「酸性・アルカリ性・中性」の説明をしているときに、教師から「お前は中性だ」といわれクラスメイトから笑われた例は端的にそれを示している。明示的カリキュラムでの同性愛の封印は、表面的な封印とは別に、実は教師の同性愛嫌悪を意味づける言葉や行動という補完作業により高校生へ働きかけられ、異性愛中心の学校を強化している。

〈教師－生徒〉関係で、教師から生徒へ伝わる同性愛嫌悪には、二つの類型が考えられる。一つは、〈積極的同性愛嫌悪型〉であり、もう一つを、〈消極的同性愛嫌悪型〉と名づける。〈積極的同性愛嫌悪型〉は、高校生への働きかけとして、教師が同性愛嫌悪を積極的に意味づける。上述の理科の授業の事例はこれに当てはま

る。このように、〈積極的同性愛嫌悪型〉は、同性愛を例に出しそのつど否定や排除を試みる。〈消極的同性愛嫌悪型〉は、同性愛に関して意図的、無意図的に触れないものである。例えば、同性愛のことが理由でクラス内に嫌がらせがあっても教師は見て見ぬふりをして黙認し、結果として同性愛嫌悪を助長するものである。〈消極的同性愛嫌悪型〉は、〈積極的同性愛嫌悪型〉以上に大きく高校生に影響している。つまり、暗黙の了解としての同性愛排除は、言語化しない、してはならないほど忌避されるものと解されるからである。

同性愛に対する教師の寛容度を調べたシアーズ (Sears, 1991) は、教育関係者の同性愛への不寛容さ、敵意を指摘する。アメリカの宗教事情を考慮しても、日本でも上述のような状況から、異性愛を自明とし同性愛に対する不寛容さは共通すると思われる。

2-2 〈生徒－生徒〉関係

それでは〈生徒－生徒〉関係ではどうか。スー・アスキューとキャロル・ロス (1998) は、イギリスでの共学学校での男子の女子への抑圧の状況と、男子校での男子どうしの力関係を研究したが、教室の中の男子同性どうしの力関係を研究する中で、同性愛を否定し排除することで、自分の異性愛性を証明することが日常化し、それが男らしさの証明となっていると同時に、同性愛の高校生に対する抑圧を強化すると指摘した。

彼らの指摘にもあるように、聞き取りからも、生徒どうしの関係において、同性愛を否定し排除の対象とすることが多かった。例えば、「なよなよしている男の子」のことを、クラスの友人がいつも「なんかホモっぽいよね」と嘲笑の対象にし、クラスのみんなが笑うという例は、同性愛嫌悪を生徒どうしが共有している端的に示す例である。〈生徒－生徒〉関係においても、〈教師－生徒〉関係のように、同性愛嫌悪の類型を考えることができた。それは、3つの類型になると思われる。これを〈積極的同性愛嫌悪型〉、〈消極的同性愛嫌悪型〉、〈中立型〉と名づけよう。これは高校生どうしの関係構築を同性愛に関する認識の視点からとらえたものである。〈積極的同性愛嫌悪型〉、〈消極的同性愛嫌悪型〉は、前述のように〈教師－生徒〉関係で述べた、積極的同性愛嫌悪型、消極的同性愛嫌悪型に重なる。中立型は、性的指向ではない他領域（部活動や学校の勉強、学校外での趣味など）について関係構築の重要性を見だし、それをもとに友達関係を維持していく。しかし、〈中立型〉も性的指向に関係性を見だすようになれば、前述の2つの型へ移行することが考えられる。いずれにせよ、〈積極的同性愛嫌悪型〉、もしくは

〈消極的同性愛嫌悪型〉が中心であり、生徒どうしの関係も同性愛を否定し排除している。

3. 同性愛の高校生の直面する5つの困難

高等学校では表面的に同性愛は封印され、実際は否定と排除の対象になっているなか、同性愛の高校生はどのように性的気づきを迎え、性的自己形成を行っているのか。

聞きとりからは、多くの同性愛の高校生が、小学校高学年から高等学校において性的気づきを迎えていた。性的気づきのきっかけについては、「何となく」「なんかまわりと違う」「男に目が行く自分を発見した」「クラスの男の子が気になって」など、自分の感情と他の人たちが持っている感情との差を感じた時という人が多かった。しかし、「同性愛になるのは同性との性体験がもとである」と語った人はここではなく、「何となく違うかんじ」という意識からであった。これは、ボーハン (Bohan, 1996) が、同性との性体験によって同性愛者になるのではなく、同性を意識することによる気づきとの指摘とかさなり、同性愛の神話言説を打ち破るものといえよう。同性との性行為をもとにして同性愛者になるわけではないのである。

小宮 (1998) は同性愛の若者の置かれる困難を、自己受容の困難、自己開示の困難、自己イメージの困難、事故回避の困難の4つに分けた。しかし、小宮の分類には、同性愛の若者に不可欠な情報アクセスの困難が欠けている。聞き取りから同性愛の高校生が強く訴えた困難は、情報へのアクセスと出会いであった。

そこで、ゲイグループやハッテン場での聞き取りをもとに、同性愛者の直面する困難を、(1) 自己受容の困難、(2) 自己イメージ形成の困難、(3) 情報アクセスの困難、(4) 自己開示・人間関係づくりの困難、(5) 事故回避の困難、の5つに整理した。図1は彼らが高等学校で直面する困難を整理したものである。

本稿では、特に、③情報アクセスの困難、④自己開示・人間関係づくりの困難、⑤事故回避の困難について詳しく事例をもとに検討する。

3-1 情報アクセスの困難

同性愛に関する有用な情報へのアクセスは困難を極める。社会には「同性愛像」としての同性愛の情報ばかりが流通しているからだ。図2は、現状の同性愛者の情報アクセスを簡単に図示したものである。共通しているのは、学校を「跨いで」情報を得なければならない点である。

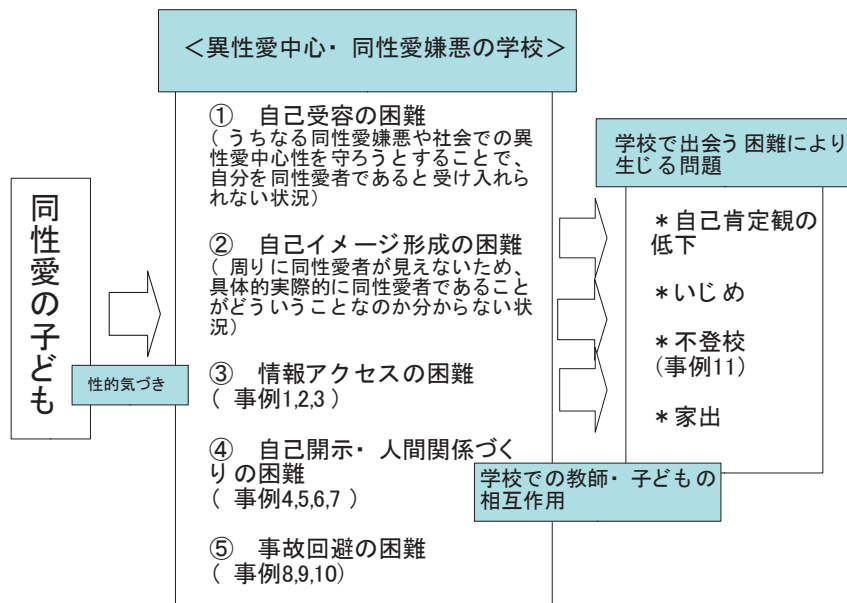


図1 5つの困難

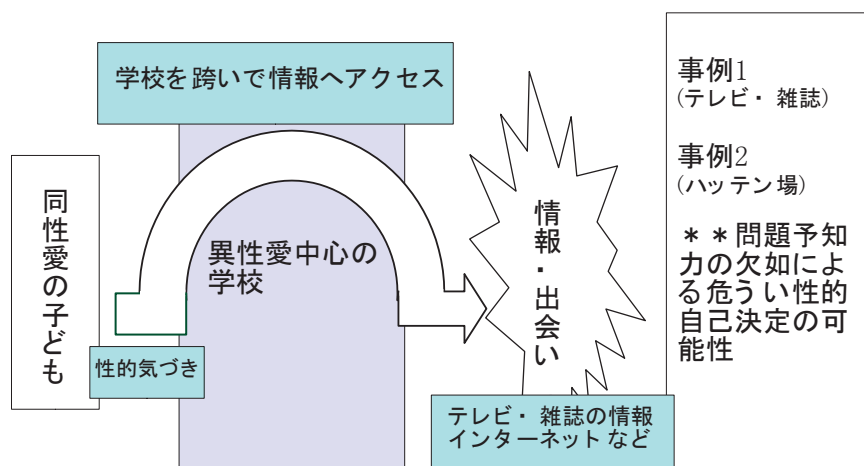


図2 情報アクセス状況

〈事例1〉

大介は、自分が周りと違う意識を持つてから、同性愛という言葉に敏感になった。中学校の頃、「新宿2丁目」という同性愛者の街をテレビのワイドショーをみて知った。中学校、高校でも同性愛のことは聞いたことがなかった。エロ本を探せば、同性愛に関する情報があるかも知れないと思い、近所の本屋にいて探したが、まったくなかった。ゲイ雑誌の存在すら知らなかった。たまたま「服」に興味を持っていた彼は、高校1年生はじめに『カジカジ』という雑誌に「ゲイの人」という文通コーナーを見つけて「かなりビビった」という。早速、載っていた人に手紙をだした。返事は29歳の大阪府内に住む男性 A からきた。どんな人だろうと思い緊張しながら A と会ったが、彼はどのように

いかわからず、A のいいなりになってしまった。すぐに A にセックスを迫られた。「もう、最悪な感じだった、気持ち悪かった」。それ以降、A と連絡を断ち、『カジカジ』に情報があることを知りつつも、高校3年まで何もできなかった。高校3年のはじめに、『カジカジ』にゲイのサークルがあることを知り、手紙をだしてサークルに参加した⁽⁴⁾。

事例からは学校内部で情報が皆無なか、学校外部で情報を探す様子が分かる。同性愛に関する情報に敏感になり、さまざまな場面で探し出そうとする。「エロ本」の大多数も異性愛に貫かれている。仮に情報があっても多くは行動に結びつく情報とはならない。その中のわずかな情報を頼りに行動するしかなく、失敗して

も次回へと積極的に行動できなくなる様子がわかる。性的気づきを迎えた同性愛の高校生にとって、少ない情報とそれに基づく実体験は、彼らの同性愛のイメージを形成し決定的にする。マイナス体験は、同性愛である自分をさらに貶めることにしかつながらない。性的気づきを迎えた高校生が、実際に同性愛者にアクセスするための行動には、学校内部ではほぼ不可能であり、学校外部で情報を求めるしかない。

3-1-1 行動の選択肢の一つとしての「ハッテン場」

異性愛者しか見えない現状で、彼らが同性愛者へアクセスするためには、何らかの積極的行動を取らなければならない。現在、ゲイ男性のための出会いの場として、ゲイ雑誌を媒体とした文通、ゲイバー、クラブ、サークル、ゲイ団体、ハッテン場、インターネット掲示板などの方法がある。出会いの場と期待を込めての行動である。性的出会いも多く、一方そこには性的トラブルをもたらす可能性も孕んでいる。

選択肢の一つに「ハッテン場」へ行くことがある。さて、ハッテン場とは「ゲイがセックスの相手を求めて集まる場所」(砂川, 1998)という。ハッテン場には、ゲイ専用のビデオボックスやサウナなどの「有料系ハッテン場」と、公園、公衆トイレなどの自然発生的にできた「野外系ハッテン場」にわかれる。

ハッテン場の大きな特色は、「匿名性とその場限りの関係」である。ゲイのおかれている状況とハッテン場の関係を「異性愛主義を補完するための装置」「ガス抜き場所」と指摘する人もいる(動くゲイとレズビアン会, 1996)。聞き取りからは、ハッテン場を同性愛者との「出会いの場である」ことが話されていた。結果としては異性愛中心性を補完するものになるものの、同性愛について肯定的な意識を形成する可能性を秘めているはずである。

ハッテン場では、会話が少なく、薄暗い場所から、アプローチできた相手でもその場限りの話しか聞けなかった。連絡先を交換しても、その後音信不通になり、着信してもでなかったことが多く、後日会って話をすることはほとんどが不可能であった。これはハッテン場が「匿名性とその場限りの関係」というルールに支配されていることを裏づけるものといえよう。では、ハッテン場での聞き取りを事例としてあげる。

〈事例2〉

啓(仮名)は、ハッテン場にしか行かないという。「ハッテン場しかいけないよ。人と騒いだりするのは好きだけど、なんかこう、(ゲイ)バーとかだと雰囲気あわなくて。だからこういうところ(ハッテン場)し

か行かないし、(ゲイバーへ)飲みにいったりはしない。中3の時に、(大阪)ミナミのあるコンビニで、ぼーっとしていたら、大学生くらいの人が声かけてきて、『バイトしないって』で、何かわからないでついていったら、ホテルつれてかれて。『マグロ状態でいい』っていわれたんで何にもしないでした。今考えれば、それがこっちの世界のはじめてかも知れない。その人からいろいろ聞いて、ハッテン場とか教わった。こういう感じ(セックスをする)の友達しかいないね。『セックスの関係のない友達ってこっちの人(ゲイ)とはないよ。なんか、みんな(セックスを)したことがある感じがする。いつも無言で(セックスが)始まって、終わってから話とかするから』。(5)

事例2は、ハッテン場で聞き取りをした高校生の話である。彼はハッテン場にしか行けないとのことであった。同性愛に関しては、「こっちの世界」と分類し、「こっちの世界」では、友達関係にセックスはつきものであると認識していることもわかる。

こうしたハッテン場に関わる問題点は、次の3点に集約できよう。「匿名性とその場限りの関係」「同性愛者はセックスの関係でしかない前提をつくること」「セックスをする場にもかかわらず、性感染症に無防備であること」である。

第一の「匿名性とその場限りの関係」は、同性愛嫌悪が大きく影響している。同じ性的指向を持つ他者とともにかく会ってみたい、もしくは性的欲求だけを満たすのに、ハッテン場は格好の場となる。異性愛社会の中で、最も忌避される同性との性的欲望を果たすことは、なるべくほかの人たちには知られたくないことである。したがって、「匿名性とその場限りの関係」は、異性愛社会に生きることと、性的欲望とを天秤にかけた結果であり、その場での最善の方法と考えられる。これでは、ハッテン場が「出会いの場」として肯定的に機能する可能性を阻み、結果として異性愛社会の補完でしかなくなってしまう。

第二は、同性愛者にはセックスしかないという思い込みをつくることである。ハッテン場では、会話がなくセックスが先行することが多い。これはセックスだけしたい人や、会話や人間関係を作るのが苦手な人にとって、話をせず身元を明かさずにセックスのみできるのは都合がよい。だが、セックスでしか同性愛者との交流ができないことは、同性愛者のイメージを「セックスのみ」へと固定化してしまう。事例3の高校生は、自らのハッテン場での経験をもとに、同性愛を定義していた。

第三は、ハッテン場をセックスする場とらえているにもかかわらず、性感染症に対して無防備であることである。これはハッテン場に来る人たちに性感染症の認識がないことだけではない。既存の性知識は、異性愛を前提としたものであり、ハッテン場に来る人たちには「関係のないもの」として解されてしまうからではないかと考えられる。実際、ハッテン場に出入りしはじめたばかりの人が、「避妊しなくていいんだから、その分楽だよ」と、性感染症をまったく考えたことがなかったという話も聞いた。自分を受け入れたくない人たちにとっても、同性どうしのセックスに関わる情報を自分のものとして受け入れないことから、性感染症の危機に晒されているとの指摘もある（動くゲイとレズビアン会、1997）。

以上、ハッテン場に関わる問題点として3点あげた。聞き取りからは、行動の選択肢にハッテン場しかない同性愛の若者が少なからず存在することもわかった。別の選択肢としてあるゲイバーなどは、雰囲気になじめないなどの理由により、行けないとのことであった。加えて、ハッテン場という場所では出会った人と友人関係を構築することは、同性愛者である事実と向かい合わなければならない、同性愛嫌悪をかかえる当事者にとって、出会いたいけど友達になれない、なりたくないという、友達関係の構築の困難もうかがえた。

3-1-2 インターネット時代における情報アクセスの問題点

簡易型携帯電話 PHS の登場（1994）、NTT ドコモの「i モード」の登場（携帯電話からインターネットアクセスが可能、1999）は、安価でパーソナルな情報受信手段の確保と、積極的なインターネット情報収集を可能にし、同性愛者の情報アクセスを劇的に変化させた。

前述の高校生の語りは、インターネット以外での情報入手の困難であって、インターネットにさえ接続できれば、情報アクセスの困難も軽減されてきたとも言える。中学生、高校生の同性愛者がインターネット上の掲示板で交流し、また彼ら自身がホームページなどの媒体を持つことで情報発信を可能にしているからである。こうした状況から、「思想的には思春期のゲイの子供たちのホモフォビアの問題は、インターネットと携帯電話の普及でもう解決された」として、その理由として「自分でゲイ関連のインターネット情報にアクセスが可能になるわけで」をあげ、「この問題は原理的に解決を見たと思う」と結論づけている（野口、2003, p101）。しかし、同性愛の高校生の同性愛嫌悪は、実際にまた原理的に解消されたものなのだろうか。

〈事例3〉

雅弘（仮名）は、ゲイショップでのゲイ雑誌の立ち読みやそこから得た情報をもとに、ハッテン場へ行くこと以外はしない。他に情報はどこから得ているのかの質問に対して、インターネット利用について、「僕、学校とか携帯とかからそういうサイト（ゲイサイト）あることは知っているんだけど、そういうのって履歴が残るじゃない。逆に調べられたら、僕のこと（ゲイだと）ばれちゃうでしょ？だから、（家や学校にあってもゲイサイトに）つなごうとどうしても思えなくて」と話していた。⁶⁾

事例はハッテン場で聞き取りをした大学生の話である。彼の話から解かることは、セキュリティ面で個人情報情報が流失する可能性が少なくにもかかわらず、インターネットへの接続にも、内なる同性愛嫌悪のためにアクセスを自制してしまって情報を手に入れることができないことである。インターネット時代は確かに同性愛者に情報アクセスを容易にした。しかし実際には、情報アクセスに関して、同性愛者の(1) 心情的、(2) 経済的、(3) 技術的、(4) 物理的のそれぞれの障害が残り、各人に大きな情報格差をもたらし、根本的な解決とはなっていないと思われる。つまり、(1) は内なる同性愛嫌悪である。事例は端的にそれを示している。(2) は、パソコン・携帯電話が買えない、買えても高額になるので使えない状況である。(3) は、パソコン・携帯電話経由のインターネットの使い方が分からない状況をさし、(4) は電波状況などによりインターネットが接続できない状況をさしている。これらは単独ではなく複合的に絡みながら、インターネット時代の同性愛の高校生の情報アクセスを阻害する要因となっていると考えられる。

また、インターネット接続をクリアしても、次に情報過多という問題に直面する。今までの同性愛の情報不足から状況が一変し、どの情報を選択すべきなのかわからなくなるのである。

情報選択には、「行動のための選択肢としての情報の多様さ」「行動のための情報の質を見極め、判断する能力」が必要であり、性的自己決定能力なしに、情報過多だけでは適切な選択はできない。「自己決定能力とは、多様な選択肢を前に自由自在に選べる内的原則を獲得しているかどうか」（宮台、1998, p253）が問われるが、その個人の内的原則は、現代社会のような複雑な社会において、安定した自尊心、尊厳によるという前提に頼るしかない。しかし、同性愛の高校生にとって現状では、自己受容の困難でも示したように、安定した自尊心や尊厳は獲得できていない。聞き取りから、

同性愛の高校生にとって性行動への自己決定には、自分の中の好奇心や切迫感、また他者からの強制など迫られたものが多く、情報選択によってはトラブルを招いていた。つまり、内的原則や構成要件を満たせる状況にないのである。問題予知力の欠如とインターネットの普及により、性感染症・エイズの広がり指摘する研究者もいる⁷⁾。

このように学校外部での情報アクセスの困難状況が軽減されてきたとはいえ、学校内部で肯定的な同性愛の情報が入手できないこと、問題予知を可能にする性的自己決定ができないことは大きな問題として残る。

3-2 自己開示・人間関係づくりの困難

掛札（1992）は、理想的な思春期のあり方を（1）自己肯定・自尊の感情の獲得、（2）それに基づく人間関係づくりの訓練とする。同性愛者は（1）（2）の経験が、思春期という特定の時間内にできないことで「思春期の遅れ」が生ずるという。なぜ思春期という特定の時間内に経験が出来ないのか。掛札は、みんなと違う恐怖や、異質を恐怖する社会のあり方が彼らの感情を無化するからだという。

「彼女いないの?」「彼氏は?」という友人の発話は、同性に関心を持ち始めている高校生にとって、脅威の言葉や質問となる。同時に彼らに異性愛を強制する仲間集団からの同調性の圧力がかかる。性的気づきを迎えた高校生は、仲間集団に受け入れてもらうために、性的指向を明かすことはほとんどなく、ひた隠すか否定するようになる。

〈事例4〉

オレ、彼女のことで悩んでいるんです。2カ月前に、告白されて、今はその娘とつきあってるんです。というの、ノンケ（異性愛者）の友達で彼女持ちが増えてきて「なんでオマエ彼女とつきあわないの?変だよ」とか言われるからです。もしかしたら、ゲイだと悟られてしまうかも、という恐れがあるからです。彼女はオレのことをすごく慕ってくれていて、オレもそんな気持ちに答えようとしたけれど、どうしてもキスやHができないんです。ハッキリ「ゲイなんだ」と彼女に言ったほうがいいのかな、とも思うんだけど。でもそれはできそうもないので、どうしたらいいのか分からないんです。別れるのが一番だと思うけど「彼女持ち」っていう肩書きもほしいんです。自分でもズルいやツダと思います。〈以下略〉（『パディ』2000年1月、p360）

事例4は、「異性愛者の演技」を迫られる例である。周りの友達の「彼女とつきあわないの?変だよ」という友達からの言葉や態度が圧力となり彼に迫る。同性愛だと自認しながらも、形式的に「彼女とつきあう」ことで異性愛を受け入れるしかない。「彼女がいらないといけない」という仲間集団からの圧力は、嫌でも彼女を持つことで逃れられる。しかし、同時に自分の中で葛藤が起きる。「うそをついているのではないか」と思いはじめるのだ。

〈事例5〉

みんな自分自身にウソをつきながら生きていませんか?僕はつい最近までウソをついて生きてきました。自分は男が好きなのに、高等学校の友達の前では女が好きだとうそをつき、好きな人ができても、その気持ちにうそをついてきました。うそをつけばつくほど、心が醜くなっていくのに、罪悪感にさいなまれるのに、ゲイが生きていくためには、うそは必要なものだと考え、我慢してきました。〈以下略〉（『パディ』2001年1月、p361）

〈事例6〉

俺はとても仲のいい友達がいていろいろ相談したり、相談されたりしています。でも俺は公の話をするのをいっさい避けています。〈中略〉俺が「男が好きなんだ」といったら友達はどう思うのかな?やっぱり変な目で見られるのかな?でも俺は彼を信じているから、本当の俺を知ってもらいたいと思うし。本当の自分を見せないと本当の親友とは呼べないと思うし。どうしたらいいのか分からない。本当の自分をずっと心の中にしまいこんだままでもいいのか?〈以下略〉（『パディ』1999年11月、p345）

事例5、6は、高等学校での友達関係で、異性愛者を装わなければならない、それを自分にうそをついている行為として解し悩む状況である。「異性愛者の演技をする自分」と、「同性愛者である自分」との2つの狭間に悩む。自分を隠すことにより、本当の友達関係をつくれないのではないかという罪悪感があることもわかる。隠すことによる罪悪感は、人間関係づくりに影響を与える。

〈事例7〉

僕は170×60×18歳の高校3年生です。ゲイだと気がついてから、学校にいても自分だけがみんなと違う人間なんだと思ってしまい、クラスみんなにだんだんと冷淡になってしまったんです。元々明るい性格

だったのに、どうしてこんなに変わってしまったんだろうと悩んでいます。今、心を開いて話ができる人ってゲイの人だけかも……。『バディ』1999年9月, p356)

事例7は、同性愛のことを正直にいけないことで、人間関係づくりが難しくなった例である。性的指向をもとにした人間関係づくりは、他者に対して自己の性的指向を明かすことが出来てから可能になる。小宮(1998)は同性愛の高校生の自己開示について、つねに困難がつきまとうことを指摘する。自己開示には返報性があり、特に開示度が低い「性」の領域を開示することは、親密な関係を築くのに大きな役割を果たすとし、同性愛の高校生は、同性愛嫌悪のため性的な自己開示ができず、そこからストレス状態になる。また仮に性的指向を開示しても、返報性の期待どころか、仲間集団からの排除も免れないと判断してしまい、友達関係の構築が難しいと指摘する。

3-3 事故回避の困難

小宮(1998)は「事故回避の困難」を好ましくない状況からの回避の困難として、親、友達、広く社会に同性愛であることが「ばれた」ことによる、現状復帰の困難や、その回避の困難性を指摘する。まず、自分の性的指向が親に「ばれた」状況についてみていくことにしよう。

〈事例8〉

自分がゲイだと自覚したのは中学校の時に、その時は「あっ、俺ってそうなんだ」ぐらいの気持ちでした。ゲイ雑誌を買うようになったのは、高校生になってから。雑誌は自分の部屋に上手く隠しておいたつもりでしたが、ある日、ベッドの上でうつらうつらしていると、フスマ越しの隣の母の部屋から「ホモの本なんて読まんといて、お母さん、そういう一番嫌いやで」と怒りを押し殺したような言葉が突然聞こえてきました。人間、本気で焦ると頭が真っ白になるって本当ですね。何も考えられなくなって、そのまま10分くらい沈黙が続きました。その間に母は階段を下りていきました。それ以来母はそのことについて何も触れてきません。息子がゲイだと認めたくないあまり、追究することが怖いのでしょうか。俺はそれ以来かなり悩みました。〈以下略〉(『バディ』2000年9月, p372)

事例8は親に「ばれた」事例である。親たちは同性愛の子どもの存在を許容することが難しい。他のマイノリティ集団と違い、性的マイノリティである同性愛

者は、本来理解を得られるはずの親から拒絶されることが多い。聞き取りからも、親に「ばれて」その後に監視され続けた、家を出ざるを得なくなったという話を聞いた。では、高等学校の友達関係ではどうか。事例を見ていくことにしよう。

〈事例9〉

〈前略〉ノンケの友達は「彼女がほしい」とか「胸のでかい女とHがしたい」とか、そんな話ばかりしています。僕はみんなに話を合わせていますが、それがすごく辛いんです。何か月か前、クラスメイトで空手をやっているKに「いい身体してるよな」と言ったら、「お前、ホモか？気持ちわりーな」と言われてしまいました。それ以来、気まづくなってしまう、Kは僕を避けるようになりました。〈以下略〉(『バディ』1999年8月, p404)

〈事例10〉

(高校の部活の合宿で同じ布団で同性どうしてじゃれあっているのを見られて) やっぱりそのことは早々にウワサになりました。引退を前にした僕が彼をかばって、僕が勝手にやったということにしました。校内でもちょっとした有名人だった僕は、再び「ホモ」のレッテルを貼られてしまいました。そのことで友人も減り、かなり本気で自殺も考えるようになりました。しかし、そんな僕を陰で必死にかばってくれたのは、当時絶縁状態にあった、親友だったんです。彼のためにも、僕を信じてくれた人のためにも、僕はホモじゃないと否定してしまいました。「本当は女の子が好きなんだ」と。でも実際に性に関心があるのは、男の子なんです。でも、かれらを裏切ることになるような気がして、自分的にはそんな自分が嫌なんです。〈以下略〉(『バディ』2001年11月, p333)

事例9、10は、高等学校で友達に「ばれた」状況がどんな事態を引き起こすかが解かる。事例9では、同性の身体に好意的な発言をただけで、「同性愛というレッテル」を貼られ排除される。事例10では、「同性愛というレッテル」を貼られたことによる仲間集団からの排除の状況と、仲間集団内の以前の地位を回復することの困難がわかる。高等学校では「同性愛であるとばれる」と「同性愛とレッテルを貼られる」ことが取り返しのつかない事態に発展することが多い。地位を回復するためには、事例10のように、「異性愛者の演技」をやりきって証明をしてみせるしかないか、もしくは開き直るしかない。また、「同性愛であるとばれること」と、「同性愛とレッテルを貼られること」は本

来別のことであるが、同じように機能する。いずれの場合も仲間集団からの排除は免れない。「同性愛とレッテルを貼られること」は、同性愛の高校生のほかに、ジェンダー規範から外れる高校生にも適用され、仲間集団から彼らを排除する機能を発揮する。

4. 困難に直面することで生ずる諸問題

このような困難を抱える同性愛の高校生は、学校で自分の位置を保障してもらうために必死になって異性愛であろうと振舞い、自分を抑える。しかし、「異性愛者の演技」と「自分へのうそ」は大きなストレスをもたらす。

さまざまな困難に直面することで、同性愛の高校生はどんな危機にあるのか。彼らには自尊感情の低下が共通して見られる（日高，2004）。内なる同性愛嫌悪が、彼らを傷つけ、自分が最悪な存在であると自認せざるを得ない状況に追いやるのである。これが自殺を最悪の事例とするさまざまな結果を導く。例えば、リマデヒ（Remadifi, 1987）は、思春期の同性愛者が、異性愛社会において、親や仲間集団から強度の否定的態度を経験することにより、肉体的・精神的機能障害に陥る危険性を指摘し、彼らの多くが、言葉の暴力、いじめ、差別を経験していることを報告した。

アメリカ連邦厚生省は、15歳から24歳までの若者のうち、同性愛者の自殺企図率が、異性愛者の若者に比べ、2倍から3倍高く、全自殺遂行者のうち、30%が同性愛者であることを報告した（Gibson, 1989, pp 110-143）。日本では『自殺死亡統計人口動態特殊報告』（1990）において、自殺の原因として、同性愛というカテゴリーはない。しかしながら、「学校問題」「その他」「不詳」と分類されているものの中に、少なからず原因として同性愛に関するものがあると推測される。

聞き取りからは、同性愛の高校生へのいじめが多く存在し、彼らが高等学校にいきたくない、また家を出たいという証言が少なからず得られた。困難による具体的教育的諸問題として、いじめ、不登校、家出を挙げて検討してみよう。

4-1 いじめ

多く出されたものが、いじめ、嫌がらせであった。近年、いじめは教育問題の中でも主要な位置にある。しかしながら、いじめの具体的な内容は、示されることは少ない。いじめにもさまざまあり、「同性愛のレッテルを貼ること」によるいじめも多く存在する。だが、

教育問題としていじめが論じられることはあっても、いじめの原因としての「同性愛のレッテルを貼ること」は論じられることは少ないように思われる。教室では「同性愛のレッテルを貼ること」は異性愛中心性を強化するものであり、レッテル貼られた者を排除する正統な理由として機能してしまう。したがって、いじめの内実、つまり何が笑いや差別の対象とされたものかという分析をして、いじめの対策を立てなければまったく意味をなさないだろう。

4-2 不登校

同性愛の高校生が、本当の自分を出せない、いじめにあうとの理由で多く出されたのが不登校という選択であった。不登校の理由に、いじめによる不登校も、もとを探ると同性愛が理由であることがある。聞き取りからは、「いじめのターゲットにされる」「自分だけが浮いてしまう感じがする」「みんなに合わせるのが辛い」など多く出された。これらを回避し、自分の物理的精神的安全をはかって、学校へ行かない選択をするのである。現在、不登校は、教育問題としていじめと同様に議論されている。しかし、いじめと同様に、学校で「同性愛のレッテルを貼られる」ことが理由で、学校に行けなくなる事実を受けとめる、予想することは困難なようである。

〈事例11〉

明（仮名）は、全日制高校を中退し、通信制高校へ編入した。高等学校とうまくあわなかったと話し、彼はべつにゲイだからということではないと前置きしながら、「通信（通信制高校）だと、あんまりクラスの人と会わないからいいんだよね。だって、（自分の同性への性的指向が）ばれて、なんかあったとき（いじめなどによる仲間集団からの排除）、すぐに（友達関係を）切ることができるじゃない。全日（全日制高校）だとできないでしょ」⁽⁸⁾と語った。

筆者はゲイグループでの聞きとりを行なったが、メンバーの多くがなぜか通信制高校に在学している高校生であった。友達を作るのにも、性的指向をもとにした人間関係づくりがもともになる思春期において、同性愛の高校生は自己開示できないばかりか、自己開示しないことによる自分へのうそに悩まされる。こうした状況を回避して、ただ高校卒業資格を得るだけならば、通信制高校は彼らのニーズを満たすものであるのだろう。

4-3 家出

性的気づきを経験することは学校内部で孤立を意味する。同じ性的指向の人たちと出会うために「高校卒業したら進学はゲイが多いはずの東京にする」との聞き取りもあるように、いまのこの孤立から逃れるために出会いを求める行動に出る。それは時に、家出という形をとることがある。家出には、二つの理由によるものがあると考えられる。一つは、自らが望んで同じ性的指向を持つ他者との出会いを求めるためのものと、もう一つは、自らの意志に反して、親から拒絶され、家族やコミュニティから排除を余儀なくされるものである。

これら二つによる家出については、わずかな情報を頼りに、その場の孤立から逃れるために同性愛者の集まる街へいってしまうことがある。例えば、同性愛者が集まる街として知られる東京・新宿2丁目には、親や地域の人間関係を捨てて出てくる若者もいれば、夏休みなどの長期休暇を利用しての「プチ家出」によって東京を目指してくる若者もいる。彼らの家出の理由は、前述の二つが混ざりあっていると思われる。

ここからも問題予知力の欠如によるトラブルが生じうる。なかには、家出して生計を立てるために売春をせざるを得ないこともある。新宿2丁目の路上で売春をしている若者は平均して30から60人くらい存在するが、彼らは全国各地から集まって来るという（動くゲイとレズビアンのかい、1998, p18）。

このように、同性愛の高校生はさまざまな困難に直面することで、いじめ、家出、不登校、最悪の場合は、自殺にまで追い込まれる状況があるのである。

5. おわりに

本稿は高等学校における同性愛の生徒の性的自己形成過程について、彼らが直面する困難を通して概観してきた。最後に本稿で議論できなかった課題、明らかにできたことを整理し、今後の研究の方向性を考えてみたい。

まず、本稿の限界であり課題は、冒頭でもあげた調査法における偏りに加えて、第一に、インターネット時代における同性愛の高校生の学校外部でのつながりを精査できなかったこと、第二に、問題予知力に代表される性的自己決定能力の内実の議論不足、またどのように育成するのかという方法論の欠如があげられる。しかし、限界や課題があるものの、同性愛の生徒の学校生活の分析というわずかな先行研究しかない状

況において、実際に現場へ赴き臨床教育的なアプローチを目指したものとしては意義があるはずである。

先行研究を踏襲しながら、その再確認、再検証を中心に、新しい発見を補足し、高等学校における同性愛の生徒の抱える性的違和感や性的違和を抱えることで生む諸問題を整理した。しかしながら、先行研究を反証するまでにはいたらず、現場で調査を通しての再検証と再確認、そこから得られた声を基にした補足、そして教育的アプローチへの視座を提起するまでとなった。

つまり、高等学校における同性愛の生徒の性的自己形成が困難な状況を、〈教師－生徒〉、〈生徒－生徒〉の観点から検討した。高等学校における異性愛中心性、同性愛嫌悪については、フェミニズムの知見である「隠れたカリキュラム」から、ジェンダー規範に異性愛中心性が包含される位置づけを確認することで明らかにした。高等学校は、表面的には明示的カリキュラムで同性愛を不問にする、つまり同性愛を封印しながら、隠れたカリキュラムにおいて、同性愛を否定し排除する実践を通して、異性愛中心性を学ばせる場であることを確認した。

そこから、同性愛の高校生の性的自己形成過程には、大きな困難があることを大きく5つにまとめ検証した。同性愛の高校生の性的自己形成に不可欠であるはずの、情報アクセスが学校内部では不可能であることを指摘できた。

情報アクセスを学校外部に求めることしかできない現状は、性の学習を奪われている同性愛の高校生の性的自己決定において、問題予知を可能にした性の情報選択が適切に行われにくいという大きな問題を提起している。問題予知力の欠如による情報選択は、彼らの性的自己形成過程、またその後の人生にも大きな影響を与えかねず、ハッテン場での事例はそれを象徴したものとも言えるだろう。

ここからも明らかに教育的アプローチとして、同性愛の高校生の性的自己決定能力育成のための包括的セクシュアリティ教育は不可欠ではないだろうか。インターネット時代による情報過多は、同性愛の高校生への選択肢を広げたかに見えるが、実際には情報過多による選択困難、学校外部でのみ情報を得るしかないという状況である。また、同性愛嫌悪による自己規制も残っており、現状ではインターネットによる情報量を評価しつつも、選択肢が広がったと楽観視できる状況ではないだろう。高等学校の同性愛の封印状況は、同性愛の高校生の学習権と性的自己決定権、そして結果として幸福追求権を侵害している状況であることを、事例を通して明らかにできたのではないだろうか。

このように学校外部で情報格差が広がる中、せめて学校だけでも、すべての生徒に等しく情報アクセスを保障し、幸福追求権につながる性的自己決定能力を育成することが必要である。また高等学校は、同性愛の封印をとくとき、彼らへの積極的教育支援を打ち出すことが求められるのではない。情報アクセスの保障、性的自己決定能力育成は、高等学校のすべての生徒にも必要なことであることは言うまでもない。こうした学校環境を作るには、教師、学校、そして教育行政の支援が不可欠である。また、セクシュアリティ・センシティプの獲得を目指す教師教育や教育行政による財政的支援、また法的枠組みも検討されよう。

本研究は、臨床教育的な先行研究に依拠しながら、実際に現場に出向き、同性愛の高校生の現状を再確認した。彼らが抱える情報アクセスの困難を新たに付け加え、教育問題としての同性愛の高校生が孕みうる諸問題を整理することができた。

現段階で、本稿は、高等学校における同性愛の高校生の性的自己形成過程の分析にとどまっている。異性愛社会に置かれる彼らの状況に鑑み、高等学校が異性愛中心性からの離脱方向について考え、教育政策としての同性愛を含めたすべての高校生へのセクシュアリティ教育が必要性的については精査されなければならない。性的自己決定能力育成の方法論についても議論が必要である。今後は、このような本稿での課題を踏まえ、諸外国との比較研究を通し、日本における教育政策として行うセクシュアリティ教育の可能性の検討という研究課題が残されている。

* 本稿は、京都精華大学大学院人文学研究科修士学位論文（2001）、日本生活指導学会第20回横浜大会課題研究「文化的多様性と生活指導」における問題提起口頭発表（2002）を加筆、修正したものである。

〈注〉

- (1) 府中青年の家訴訟・二審判決（1997/9/16、東京高裁）『判例タイムズ』986号
- (2) 例えば、“人間と性”教育研究協議会（性教協）は、会内に同性愛プロジェクトを発足させ（1990）、教室にいる同性愛者を視野に入れた授業を模索した（「新しい風景 性教育と同性愛」（1991））。1990年代後半から、性教育や生活指導の分野で、教師が同性愛の高校生の現状を報告することが増えた。
- (3) 同性愛の高校生が、ゲイの当事者でもある筆者との関わりから、〈カミングアウト・ストーリー〉を通して、〈わたしたち〉の一員として〈わたし〉を語り、〈わたし〉が体験してきた孤独や痛みを個人的な

ものではなく、わたしたちの共通の問題として語るといふ、個人的なものから、共同のかつ政治的な問題へと変換させる意味を持つ（飯野由里子「差異を持つ〈わたしたち〉の語られ方—あるレズビアン・アクティビストのライフヒストリー—」桜井厚編『ライフヒストリーとジェンダー』せりか書房（2003））との認識に立つ。筆者は、大阪のユースグループ（VSG）へスタッフとして入り、調査者—被調査者との不平等関係に注意しながらそのグループを中心にインタビューを行った（尾辻かな子・杉山貴士・中村泰輔「同性愛ってフツーだよ」『季刊セクシュアリティ』No. 1, エイデル研究所（2000））。

- (4) 高校3年生（17歳）大介（仮名）の大阪のゲイグループでの聞き取り（2000/10/14）。
- (5) 高校2年生（17歳）啓（仮名）の大阪市内の有料ハッテン場での聞き取り（2000/8/4）。
- (6) 大学生（18歳）雅弘（仮名）の大阪・有料系ハッテン場での聞き取り（2003/5/19）
- (7) G Aynalem, C Bemis, LV Smith, K Kenney, J Montoya, H Rotblatt, PR Kerndt "The Internet : Emerging Venue for Syphilis Epidemics Among Men Who Have Sex With Men in Los Angeles" 2004 National STD Prevention Conference Oral, Symposium and Workshop Abstracts (<http://www.cdc.gov/std/2004STDConf/C-OralSympWorkAbstracts.htm>)
- (8) 通信制高校3年生（18歳）明（仮名）の札幌ゲイグループでの聞き取り（2000/5/14）。

〈文献〉（アルファベット順）

- 『バディ』テラ出版、（1999/5—2001/5）
- バダンテール・E/上村くにこほか訳『XY 男とは何か』筑摩書房（1997）
- Bohan, J. S., "Psychology and sexual orientation : Coming to terms". Rutledge, 1996
- 藤田英典ほか編『教育学年報7 ジェンダーと教育』世織書房（1999）
- Friend, R. A., "Choices, not closets : Heterosexism and Homophobia in school. Beyond silenced voices : Class, race, and gender in US schools." SUNY Press, 1993
- 伏見憲明『プライベートゲイライフ ポスト恋愛論』学陽書房（1991）
- Gibson, P., "Gay male and lesbian youth suicide. In the U. S. Department of Health and Human Services, Report of the secretary's task force on youth suicide". U. S. Department of Health and Human Services, 1989
- Harris, M. B., Bliss, G. K., "Coming Out in a School Setting : Former Students' Experiences and Opinions

- about Disclosure." *School Experiences of Gay and Lesbian Youth : The Invisible Minority*, The Harrington Park Press, 1997
- Herr, K., "Learning Lessons from School : Homophobia, Heterosexism, And the Construction of Failure." *School Experiences of Gay and Lesbian Youth : The Invisible Minority*, The Harrington Park Press, 1997
- 日高庸晴ほか「ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究」『日本エイズ学会誌』第6巻第3号 (2004)
- 井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学10 セクシュアリティの社会学』岩波書店 (1996)
- 岩田孝「携帯電話の利用と友人関係」深谷昌志監修『電子メディアの中の高校生』ベネッセ教育研究所 (2001)
- 伊藤良徳ほか編『教科書の中の男女差別』明石書店 (1994)
- 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房 (1998)
- 厚生省大臣官房統計情報部『自殺死亡統計—人口動態統計特殊報告』厚生統計協会 (1990)
- 小宮明彦「同性愛の子どもの実態に関する覚え書き」『学術研究 —教育・社会教育・体育学編—』第49号、早稲田大学教育学部 (1998)
- 松田美佐「パーソナルフォン・モバイルフォン・プライベートフォン ライフステージによる携帯電話利用の差異」川浦康至ほか編『現代のエスプリ』至文堂 (2001)
- 宮台真司ほか『〈性の自己決定〉原論』紀伊国屋書店 (1998)
- 文部省告示『高等学校学習指導要領』大蔵省印刷局 (1999)
- 野口勝三ほか『オカマは差別か』ポット出版 (2002)
- 小川真知子ほか編『ジェンダーフリー教育』明石書店 (1998)
- ケン・プラマー、桜井厚ほか訳『セクシュアルストーリーの時代』新曜社 (1998)
- Remafedi, G. J., "Adolescent Sexuality : Psychosocial and Medical implications". *Pediatrics*, 1987
- Sears, J. T., "Educators, homosexuality, and homosexual students : Are personal feelings related to professional beliefs?" *Journal of Homosexuality*, 22, 1991
- スー・アスキュー／キャロル・ロス／堀内かおる訳『男の子は泣かない』金子書房 (1997)
- Sugiyama, T., 'Japan, Gay and Transgender Youth in' "Sears, J. T., " *Youth, Education, and Sexualities : An International Encyclopedia*" Greenwood Group Publication, 2005
- 砂川秀樹ほか『『ハッテン場』など日本のゲイをとりまく性的環境の調査、分析—アウトリーチ活動をアクション・リサーチの手法として—』『日本＝性研究会議会報』第9巻第1号、日本＝性研究会議 (1997)
- 辻大介「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明ほか『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版 (1999)
- 動くゲイとレズビアンのか「ピア・エデュケーションの手法に関する研究」『平成8年度厚生科学研究費補助金エイズ対策研究推進費エイズ患者HIV感染者に対する直接的支援に関する研究報告書』(1996)
- 動くゲイとレズビアンのか「ピア・エデュケーションの手法に関する研究」『平成8年度厚生科学研究費補助金エイズ対策研究推進費エイズ患者・HIV感染者に対する直接的支援に関する研究報告書』(1997)
- 動くゲイとレズビアンのか「性的指向と健康問題 同性愛をとりまく問題 (思春期・エイズ・偏見等) の理解」(1998)
- Unks, G., "The Gay Teen : Educational Practice and Theory for Lesbian, Gay, and Bisexual Adolescents", Routledge, 1995
- 渡辺大輔「若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり」『教育学研究』第72巻第2号、日本教育学会 (2005)
- 山田綾「学校におけるジェンダー・セクシュアリティの政治」子安潤ほか編『学校と教室のポリティックス』フォーラムA (2004)
- 山本直英編『性の人権教育論』明石書店 (1999)
- 矢島正見編『男性同性愛者のライフヒストリー』学文社 (1997)